

タウンミーティング 会議録

日 時：平成22年11月30日（火） 19:00～20:43

場 所：生地コミュニティーセンター（生地）

テーマ：1. 小中学校の再編について

2. 自然エネルギーの利活用について

3. 水博物館（地域観光ギャラリー）の整備について

参加者：57名

【事務局】

ご苦労さまです。

ご案内の時刻になりましたので、只今から平成22年度黒部市タウンミーティングを開催いたします。

今年も昨年同様に市内4つの中学校校下ごとに開催することとしておりまして、本日は最終日であります。

今回のテーマにつきましては、一つ目が「小中学校の再編について」、二つ目が「自然エネルギーの利活用について」、三つ目が「水博物館（地域観光ギャラリー）の整備について」、以上3つのテーマであります。

最初に市長からこのテーマについて、約20分ご説明申し上げます。その次に、会場の皆様方からテーマについて順次ご意見、ご提言をお受けいたします。

なお、終了時間は8時30分ごろを目途として進めていきたいと考えておりますので、ご協力をお願いいたします。

また、先ほど受付でアンケート用紙をお配りいたしました。この場でご発言できなかった皆様からも自由にご意見をいただきたいと思いますので、日頃から感じておられることをご記入いただきまして、お帰りの際、受付で回収させていただきますので、よろしくをお願いいたします。お寄せいただいた意見につきましては、今後、市政運営の参考にさせていただきます。

それでは、堀内市長からごあいさつとテーマに関して基本的な考え方を述べさせていただきます。

【市長】

皆さん、こんばんは。皆様方には、仕事を終わられてお疲れのところお集まりいただきありがとうございます。

また、日頃から黒部市政の進展のために、各般にわたって大変ご理解ご協力を賜っておりますことに対しましてこの場をお借りしまして感謝申し上げます。

そしてまた、今回のタウンミーティングの開催にあたりまして、地区自治振興会、町内会の皆さんには大変お世話をいただきました。心から感謝申し上げます。

さて、10年間の本市のまちづくりの指針となる第1次総合振興計画がスタートして2年と半年が経過いたしました。現在、計画に基づく各種施策の推進に鋭意取り組んでいる

ところでありますが、現政権下のもと事業仕分け、或いは国内の円高により、我々、地方行政に何らかの影響が及ぶことが懸念され、今後の動向を注視しながら、重点プロジェクトを着実に進めていく必要があると考えております。

また、今後、市民と行政が共に考え、自己決定、自己責任のもと、それぞれの責任と役割を果たしていく新たな自治の仕組みづくりが、より一層求められてくるものと考えております。そのためにもこれからのまちづくりに向け、市民の参画と協働によるまちづくりが大変重要であり、このたび「黒部市協働のまちづくりガイドライン」を策定したところであります。今後、市民の皆様にはそのガイドラインの周知に努めたいと考えておりますので、より一層のご理解、ご協力をお願い申し上げます。

それでは、時間も限られておりますので本日のタウンミーティングのテーマについてご説明を申し上げたいと思います。

詳細については、「課題提起」をご覧ください。

【事務局】

それでは、ただいまから本日のテーマに関して、会場の皆様からのご意見やご提言をお受けいたします。係の者がマイクをお渡ししますので、地区名、お名前につき、ご意見を述べていただきます。

もう一つお願いがあります。このタウンミーティングでは、限られた時間の中でできるだけたくさんの方からご意見をいただきたいと考えておまして、ご発言はなるべく簡潔に、お一人3分以内でお願いいたします。

それでは、ご発言のある方は挙手をお願いいたします。

【市長】

どんなことでもいいんですが、限られた時間の中で進めておりますので、出来るだけ積極的にお願いしたいと思います。そこで特に今回のテーマの中で重いテーマは小中学校の再編ではないかなと思います。先ほどはここ30年間ほどで児童生徒数が45%ほど減ったという話をしましたが、この後の見込みとしてどうなるかといいますと、今日は生地、村椿の地区の方が多様な気がしますので、例えば生地だと、今現在212人の生徒がですね、平成25年ですから3年後には200人を切ります。195人。それから、もう3年たったら170人を切って169人という見込みをしております。ここまでは今の0歳児からの積み上げですから、ここまでは大体そういうような推移をするのではないかなと思います。村椿は実は135人ですが、平成25年で132人、ほとんど変わらない状況で行きます。そして平成28年には123人。だいたい120人位になるのではないかなという状況であります。高志野中学校は今現在257人の生徒がおりますが、平成25年で245人。平成28年に266人ですからほぼ今のところ横ばいではないかなと考えております。そういうことも踏まえてご意見なり、ご提言をいただければありがたいなと思います。

学校の耐震化の話をちょっとしまししょうか。耐震化の状況がどうなっているかということですが、村椿小学校は、耐震基準は適合しています。村椿小学校は耐震化をする必要はありません。生地ですが、体育館は耐震化基準に適合しておりますが、校

舎は耐震化になっていません。高志野中学校の校舎は耐震化になっています。そして体育館は耐震化になっていません。こういう状況です。

どういうデータを出せば発言が出るかわかりませんが、黒部市には中学校が4校あります。滑川市は2校、魚津市は2校であります。朝日町は1校で、入善町は3校から2校に最近なりました。小中学校の再編のことだけでなく新エネルギーのこともいいですし、水博、フィールドミュージアムの水博物館構想についてでもいいですから遠慮なくご発言をいただければと思います。

【Aさん】

市長さん、ご苦労さまです。

この村椿と生地には関係ないようなことをちょっと聞いてみますが、私は田家の鏡野というところで田んぼをしています。それで、旧8号線から鏡野へ上がっていくときの、新川牧場へ行くときの道路の右側に用水があります。ああいう斜面の用水で、水を利用した水力発電をすれば、地域の人たちの電気がそこでできるのかなと思うんですが、よく市長さんが市には水の権利がないとあってよく言われていますけど、やっぱり、急斜面じゃなかったら電力をつくられない。例えば、先ほどの村椿でも、飛驒のところには水が入っていますが、急斜面じゃないからできないということもありまして、ちょっと余談的なことも言いますが、私が県のJAの中央会にいますと、魚津市のある水力発電をする機械をつくっていらっしゃる方がよく売り込みに来ておられます。それで、中央会の会長さんがどここの川は斜面があるから、次に黒部もひとつどうかって言われます。そういう斜面があって水があれば、電気を起こして、その集落だけでも自然の電気ができればいいのかなというのはちょっと思いました。

【市長】

黒部とすれば、各地に多くの水が流れていますので、それを利用して地域発電を行うことができれば非常にうれしいんですが、Aさんが言われたように、水利権というものがあって、自由に水を使うことができないということがあります。

今回、愛本地域で宮野用水を使って小水力発電を、実は、来年度、つくって完成させたいと思っています。先ほど言った規模のやつを、実は、23年、24年の2カ年でやろうと思ったんですが、国の制度等が少し見直される可能性があるんで、来年は思い切って1年間で整備したいと考えております。

そこで、これまでもそういう宮野用水を使った発電の構想は何度もあったんですが、ずっと水利権で許可をもらえなくて、使ってはならんということで許可をもらえなくてここまで来た経緯があります。この水利権というのは、国がそれぞれ発電水利とか農業用の慣行水利権とか、そういうようなものをずっと決めてきたんですが、明治の時代の河川法ができたころからの権利というのは、ほとんど100年以上、何も変わっていないのが現実であります。ただ、こういう時代の中で、新エネルギーに対して国が積極的に取り組むという考え方の中で、今回は発電水利の許可をとるのではなくて、慣行水利権という農業の水として流されている、田んぼで水がたくさんいるときと、少ないときによって水を流してもらえる量が変わるんですが、慣行水利権の範囲内だったら発電してもいいということで、

ようやく許可をもらえたということでもあります。

そこで、今回、宮野用水で発電するのに、私は、いろいろ3年間近くいろいろ議論があったりした中で、1つの条件として採算がとれるのであればやろうということです。ずっと議論してまいりました。そして、今回、実はこの事業に6億円ほどかかって、国から半分ほど補助が入って、残りは市の負担になるわけではありますが、それで、先ほど言った規模の発電をしたら、これは採算がとれるということに計算上なりましたので、それならやろうということで、名水の里とか、この黒部川流域の豊かな水を使って1つのモデルとして黒部市がこの水力発電事業をやるということで決めて、今、事業を進めようとしています。

そこで、それ以外のところの小水力発電をもっとやればいいじゃないかということでもあります。まず、1つは水利権として許可をもらえればやれる。ただ、なかなか条件が難しく、許可をもらうには相当苦勞するだろうということと、それと、もう一つは、採算がなかなかとれないです。ほとんど採算がとれないということがあって、やはり、電力会社から電気を買うよりも、2倍、3倍のコストをかけてやることはあまり黒部市とすればメリットがないのではないかと。教育的観点とか、観光目的とかで設置しているところもあります。県なり市が負担してやっているところもありますが、黒部市の場合の一つ一つがある意味では採算がとれるようなことでやりたい。

魚津の開発しておられる会社のことよく知っていますが、設置する場所がない。要は、水利権で、全部許可がなされないものですから、水利権のない海水みみたいなところの水を利用して、一部やろうという場所もないではないんですが、普通、我々が目にするような用水では設置することはできません。そんなことはできませんので、なかなか普及しないのではないかと思いますので、昔のダイロみみたいなもので、水でスクリーを回して電気をつくったり、いろんな農作業をしたりというようなものが、あのころはあんまり取り締まりというか、厳しくなかったからいろいろやっとなんでしょうけれども、今、電気をつくったりすることについてはほとんど許可がおりない。

今、宇奈月温泉街で生活排水を一部利用してちっちゃな2.2キロほどのマイクロ発電みたいなことをしようとしています。発電所をつくるほどの資料提出を求められておまして、相当、担当者は苦勞しています。そういうようなところを、もう少し規制を緩めてもらわなければ黒四ダムをつくるのも、ダイロも同じような資料提出を求められておってはなかなか進まないということでもありますので、ぜひ、いろんな規制を緩めていただくことは国のほうにはお願いしていきたいと思います。その上で、緩められれば、そういうところで、この後も黒部市も黒部川の排水等を使って可能なところについては、効率のいいところはやりたいとは思っていますけれども、そんな簡単にやれることではないということとはご理解いただきたいと思えます。

【事務局】

Aさん、よろしいでしょうか。

そのほか、ございませんでしょうか。

【Bさん】

生地のBです。いつもありがとうございます。

私は、やはり、観光のことを少し聞かせていただきたいと思います。

15ページのほうにフィールドミュージアムの玄関口ということで、観光客に対してビジネスマンですとか、いろいろ出ておりますが、私ももう来年でボランティアをやりまして10年になります。ですけど、最初のころは、やはり黒部が観光地ということで進めてこられたと思いますが、今、少しイメージ的にはダウンしているのではないかなという思いに絡まれております。なぜかといいますと、やはり、地域の人たちも観光というものにはまだあまり意識はしておられませんか、上におられます行政の方たちも、ほんとうに黒部市が観光地なのかって、これは前から言っておりますけど、そういう思いがまだあるのか、強いのか、ちょっと私にもまだわからない点もありますし、この図面では地元観光ですとか、学習ですとか、生涯学習ということになれば教育委員会とか、いろんな人たちと一緒に黒部市を観光地にする必要があると思うんですね。

そういう点で、そういう連絡とかがちゃんとできているのか、例えば、ほかからは小学校の遠足ですとか、魚津からとかいろいろなところから来られまして、水だんごの体験ですとか、そういうのはほかの地域からはあるんですけども、黒部市からそういう依頼を受けたことがあまりありませんし、生地小学校でも、一昨年ぐらいまで、食として水だんごの体験ですとか、4年生になったらそういう生活の勉強をしたりとか、そういう依頼を受けておりましたが、最近になって、4年生になってまち歩きをすとか、小学校からそういう勉強の依頼を受けておりません。今年受けたのは、私はたまたま孫がおりまして、保育所の子供たちと一緒にまち歩きをしました。

そういう面で、まだまだ地元の人たちは観光ボランティアに観光は任せておけばいいという、それはまちの人たちだけじゃなくて黒部市全体の人たちがそういう思いで、まだおられると思うんですね。皆さんで黒部市にそういうお客さんを招くというときに、ほんとうにそれだけでいいのかなという思いがあります。ですので、この計画はすごくきれいに分かれていますけど、滞在型ですとか、いろんな面で成功させるためには、高岡さんとかがやっておられるのは、私たちが先にやっておりましたけれども、今はもうショップですとか、どんぶり物ですとか、飲食店のほうにもどんどん広がっていていると思うんですね。そういう面では、やっぱり黒部はまだまだおくれているんじゃないかなと思いますし、それから、もう一つお願いは、やはり、黒部市は観光を目指すと言われましたけど、観光課の人たちも、役所の方たちですのでメンバーがかわられますよね。そうすると、やはり、エージェントの方たちとのつながりが薄くなっていきます。営業になるわけですけども、そういう点でも、2年に1遍とかかわっていかれますと、どんどんやっぱり気持ちも薄らいでいくような気がしますので、そういうプロジェクトを黒部市で立てられましたら、やり遂げるまでやっていただける方、そういう知識のある方とかも置いていただければいいんじゃないかなと。何日前かに南砺市の話をお聞かせいただきまして、やはり、その1人の方がそういうものに目覚められて、すごい力を入れておられて、ずっと何年間かやっておられるという話も聞きましたので、そういう点、黒部市も、この後、いろいろな絵をかいておられますので、どういう考えでおられるのか聞かせていただきたいと思います。

【市長】

ありがとうございました。

Bさんのおっしゃるとおりだと思います。

黒部市の中で、特に、合併後の黒部市の中で観光といったら宇奈月温泉と黒部峡谷、ここが観光地であって、それ以外は観光というふうになかなか思ってもらえない部分があります。特に、宇奈月温泉観光協会の皆さん方は、やはり、特にそういう気持ちが強いのではないかと感じております。そこで、やはり、これからはまち歩きなんかのそういう都市観光、Bさんはわかっておられると思いますが、観光都市じゃなくて都市観光をやっぱり広めなければならぬということで、自分たちの生活そのものが磨き上げれば、それが着地型観光になるという考え方、その認識というものは黒部市全体にまだまだ理解されていないということがあります。

そのために、私は、特に合併した後の観光振興を黒部市全体でやるためには、宇奈月温泉の観光協会と黒部市の観光協会がまずは合併して、そういう認識に立つということが大事ということで、観光協会の合併をしていただきました。それから、やはり市職員も、今日は何人もおりますが、市職員もそういう都市観光という理念をまだまだ理解していない職員もやっぱり多いのではないかと。着地型の観光というのは何なのかということがまだ理解していない、そのことをまず市職員が理解することと、それをきちっとやっぱり実現するための、そういうような知識とか、そういうノウハウをやはり持つということが大事です。そこで、さっき言われたようなそういうためにはそういう観光カリスマとか、観光にやっぱり特化した人を育てていくことが大変大事だと思います。

そういう中で、今、観光協会の皆さん方もそういうことを今強く感じておられまして、それでは観光協会だけではなかなか実現できないから、観光局というそういう組織の中で、自分たちがそういう商品を開発して商品をつくり出して、売り出して、そうやって市全体の観光振興を図ろうというようなことを今計画されております。確かに、それを進める事務局といいますか、人の問題が大変大事で、そこがまだまだうまくいっていないんだろうと思いますので、そういう点は、今ご指摘いただいたようなことについては、人材を育てるといえるか、つくっていくことについてはこれからさらにしっかりとやっていきたいと思っております。

それから、もう一つは、ボランティアでは限界がある、ここはやっぱりBさんを中心として、観光ボランティアの方々には大変苦勞をかけておりますが、ボランティアでは限界があって、これ以上はできない。逆に、これ以上やると、お客さんの評判を落とすだろうというふうに思っていますので、やはり、それなりの受け入れ態勢、観光ガイドの皆さん方のボランティア以上の受け入れ態勢をどうしていくのか、ボランティアではもう限界があって、生地のまち歩きだけでも年間2万人以上の方が来られるようになって、ボランティアでやっておられる方々の対応だけでは満足して帰っていただくことは難しい。ある程度、組織的に、またある程度ビジネスになるような体制をつくって行って、その受け入れをしていかないと、これまではボランティアで受け皿をお世話いただいていたんですが、そういう体制づくりというものが、やはり、仕事、ビジネスにつながるような体制づくりをきちっとしていかなければいけないのではないかと。そうでなければ、これ以上の観光にとっての発展はなかなか、特に都市観光に対する発展はなかなかないのではないかなと思います。

ですから、本来の、これまでの大きな宇奈月温泉とか黒部峡谷という従来の観光資源と、

着地型観光、都市観光の部分と、どう連携していくかということが大変大事であって、そのことが、これからではありますが、そういう体制づくりに努めていきたいと思っております。いろいろご意見があると思いますが、また、一緒にそういうところをやっていききたいというふうに思います。

【事務局】

Bさん、よろしいでしょうか。
ほかにございませんか。

【Aさん】

Aです。
皆さん、言われないのでちょっと。市長さん、今、小学校、中学校の子供の減少で、学校が、例えば、村椿と生地と合併するという今日のスライドを見て、ほんとうに子供たちが少ないんだなと痛感しています。それで、やっぱり、子供が少なくなるというのは黒部市も、あるいは富山県も減少していくということは、ほんとうに恐ろしいことだと思います。私たちは何をなすべきかといったら、結婚してもらおうことやね。結婚してもらってたくさんの子供が、この黒部市にわいわいと子供たちの声が聞こえて、若いパパとママがこの黒部市に住んでくださればいいのですが、市長さんは、その減少問題に対してどういうふうに思っているのかなということを1つと、昔から、例えば、東京ばかり、地方から東京へ行く、例えば、こんな黒部市は山から三日市のほうに人口が固まる、そういうことも国が減びると私は何かの本で読みました。やっぱり、山も里も、海のところにも満遍なく人が住んでこそ市が豊かに暮らしていくのだと、1つのところにばかり人間が集まると、市、県、国が減びるということを、私は最近読んだんです。でも、ある人たちは、そんな山のところは雪すかしのお金も要るし、それこそ電気のお金も要るからだめだという方もおられます。でも、そういうことじゃなくて、やっぱり、野に山に海にみんなが元気よく暮らせる黒部市であってほしいと思っておりますが、人口のことに、市長さんは未来の黒部市をどう考えているのかなという、何か市長さんの考えを聞いてみたいと思います。

【市長】

先に暗い話からしますと、2050年に日本の人口は9,000万人になるよと言われております。約40年後に9,000万人、それがもっと減って8,500万人ではないかという説を最近よく聞きますが、8,500万人になったらどうなるかといいますと、大都市圏はあまり減らないだろうと言われておりますので、今、1億3,000万人ほどいるとすれば3,000万人が大都市圏にいて、地方に約1億人がいるということなんですね。ところが、それが8,500万人になったら、3,000万人引いたら、何と5,500万人で、地方の人口は半分になるという話ですね、40年後に。もしかしたら、当たっているのかもしれない。地方の人口は約半分になってしまうだろうというふうに予想されているところがございまして、もし、そういうことになったら、富山県はもう50万人か60万人かということになったら大変なことになるだろうと思います。

そういうふうにならないようにどうしていくかということになりますが、やはり、そのためには地方が急激に人口が減っていきたくらうと想定される中で、地方の都市間競争がものすごく高まるのではないかなと、地方都市の中で、やはり極端に減るところとそれなりにしか減っていかないところの差が出てくる、富山県の中でもかなり差が出てくるだろうと私は思います。

そういう中で、ほかの市、町の心配はできないので、黒部市がどうやって減らないようにするのかということについては、1つのこれだという決め手は当然ないわけでありまして、それは安全なまちだとか、教育だとか、福祉だとか、そういうものをしっかりと充実させることによって人口減少をある程度は押さえてくれるのではないかなと思います。

それと、最近言われた部分というのは、結婚しない若い人たちが、若くなくても結婚しない人が多いんですが、そういう人たちにやはりいろんなチャンスというか、機会をつくってあげるべきではないかと。私は数年前は議会でも質問されて、そういう結婚問題は個人の問題で行政がそんなにかかわることは難しいというようなことも言ったときがあるんですが、最近思うのは、ほんとうにそういう機会がなかなかつくれないのであれば、行政が支援してでもそういう機会をつくっていくべきではないかなと思います。私は個人的には、ちょっとしたきっかけで紹介してあげて、簡単に結婚された人が何人か最近いまして、こんな簡単なことで結婚するのかと。私自身じゃないんですが、うちの女房が写真を何枚か、だれかいい人いないかみたいなことで、ちょっと紹介してあげたら、何カ月かたったら結婚することになりましたみたいなことがあったりしたもので、そういうことでなるのであれば、やはり何かそういう体制、いろんなことを心配している人ってたくさんおられますので、そういう方々に対する支援ということなども考えていくべきではないかなと思います。できれば結婚して子供を2人以上つくってほしいなと思います。

【事務局】

Aさん、よろしいでしょうか。

【Cさん】

私はCと申しますが、今、小中学校の合併の問題が持ち上がっておるんですけども、これは生地と村椿ですけども、これは、寺田市長さんがおられたとき、生地と村椿が合併してやらんかというような話が持ち上がったんですよ。ですけども、当時の市議会議員と他の役員の方々が反対してうやむやになっていたんです。寺田市長さんから、今、何十年たったんですか。政治家とかこういう方々はやっぱり何十年先を見て、それを提案して、できれば実行していつてもらいたいですね。

ですから、やっぱり、例えば、話は違ふんですけども、市の庁舎なんか、三日市小学校の跡地でと聞いておるが、今、20年も30年もしたら、一体だれがこういうところにこういうものをつくったのかなと。今、宇奈月から大布施のほうまで広い道を1本つくるのに一生けん命になっておる。そういうふうは何でされるのかと。そういうわからんような政治家ばかり黒部におるのかと、そう言われんようにしてもらいたい。そういうのはやっぱりトップの人をはじめとして、市会議員。市の教育とか文化とか、そういう人たちは肩書ばかりで、将来のことは一人も見ておらん。寺田市長は何と立派な人やったなど、見

る目はやっぱりあったということ。だから、何事につけても、やっぱり何十年先を見詰めて市政を運営してってもらいたい。今になってこういうことを言って、だれが見ても、あのときに、生地と村椿の学校を一つにしておけば、村椿小学校もつくらんでもよかった。生地の体育館もいらなかった。だから、要らん銭ばかり使っている。そういうことをやっぱり、市議会議員、市長さん、こういう方々がもっと勉強してもらわなきゃ困る。もっと先を見て歩いてってもらいたい。そういうことなので頼みます。

【市長】

先を見据えるということは非常に大事かと思います。その中で、やっぱり、住民の皆さん方の考え方をきちっとまとめるということがいろんな施策を実現するためには大事なので、その当時、おそらく生地小学校、さっき言いましたように、30年前は700人の児童がいたんですね。村椿小学校にも、おそらく四、五百人の生徒がいたんだろうと思いますが、やはり、そのタイミングというのがあると思いますので、基本的には子供たちの教育環境をしっかりとつくってやるということが大事なので、そのタイミングを、今、考えておりました、そのためには近いうちに生地と村椿の統合というものも考える必要があるのではないかなと考えているところであります。ぜひ、今、話して、2年後、3年後ということには当然ならないわけでありますので、今から議論していつぐらいに。さっきありましたように、東布施と田家は平成25年ごろまでには統合させたい、前沢と三日市は平成30年ごろまでにはという、1つの目標を持って、いろいろ地域の住民の皆さんの理解をいただきながら進めるということが大事ではないかと思いますので、おっしゃられるように、将来を見据えた上でいろんなことを決めていきたいと思います。

【事務局】

はい、どうぞ。

【Dさん】

生地のDと申します。

今程の意見もありましたので、関連した質問を入れて、意見を言いたいと思います。

小中学校の再編のことですが、東布施小学校と田家小学校が平成25年というのは、何か、具体的に議論は進んでおるのでしょうか。25年というと、もうあと1カ月で23年ですので、2年後ぐらいの話ですから、かなり進んでおるのかなと、ちょっとわかりませんが、地元の私らの生地小学校と村椿小学校では統合を検討という言葉でくくってありますので、これから地元でも検討してもらいたいという意味かなと。

それから、小中学校の再編のことについてそれぞれ市民のアンケートを見ますと、やはり、各学年が二、三学級、少なくとも3学級ぐらいというような、あるいは中学校はもう少し多い学級数を望んでおられると思うんですね。それは、要するに、私に言わせると、総論としては賛成なんですね。具体的に生地小学校と村椿小学校をくっつけたらどうなるのか。やはり、皆さんは1学年に3学級欲しいんだけど、じゃ、くっつけるとなったら話がややこしくなってくるんですね。といいますのは、隣の魚津市は二、三年前から、こういう議論を各小学校校区の単位でやっておるんですが、なかなか進まないというのが現状

ですわね。最近でも、何か山のほうの学校かな、そういうのも、我々市民感覚から言えばもうとっくにくっついておらんなんと。1学年にほんの数人しかおらんような学校がなぜくっつかないのかという考えになりますけれども、いざ、地元で検討するとなると、おらが学校、やはり地域のシンボルということで、なかなか話が進まんというのが現実ですわね。

私のところ、生地なんかでも、まだ具体的なその部分が、生地小学校と村椿小学校だと決めてやっておるわけじゃないものですから、なかなかこれも意見が出ないと思うんですけども、その辺のことを、もう少し我々自身も考えていかなければならないですが、必ずしも、生地地区あるいは村椿地区に限るからだめなんですね。例えば、一部、大布施地区あるいは石田地区から通う子たちも入れて1つの学校にするとかという考え方をしないと、この話は全然進まないのではないかなと。そういう意味では、まずは、私の考え方で言いますと、この再編については中学校からやればいいんじゃないか。

そういう意味では私どもの高志野中学校は生地、村椿、大布施、3つの地区から、特に、大布施地区なんかでしたら、中央小学校という小学校から、桜井中学校へ行く者と高志野中学校へ来る者ということで、別れ別れになるという状況がありますね。そういったことであつたら、その辺のところあたりは中学生ぐらいになったらわりとスムーズに行きやすいんじゃないかなというような感じもしますので、そこで、まず1つは話しに行って、そして小学校とかということを見ると、先ほど、Cさんのご意見にありましたように、やはり、5年先、10年先じゃなくて、20年先、30年先を見込んだようなことを考えないと、また同じことを繰り返して終わるんじゃないかなと思いますので、もう少し広い範囲で、我々は考えるべきじゃないかなというふうに思っています。

以上です。

【市長】

ありがとうございました。

確かに、今年のタウンミーティングも、これで4会場目で最後ですけども、この小中学校の再編は重いテーマだなと思っておったんですが、実は、厳しい意見、反対意見というのはほとんど出ませんでした。今まで3会場、今日が4会場目ですけども、ほとんど出なかったです。ですから、ある意味では総論賛成、各論なかなか難しいということになる可能性が大だと思います。

そこで、黒部市とすれば、旧宇奈月町が合併前ぎりぎりに4小学校を1つに、宇奈月小学校に統合されたという実績があります。統合に踏み切れられた旧宇奈月町の時代の人たちには大変私は敬意を表してまして、よく4小学校を統合されたなというふうに思います。いろんな問題があったそうではありますが、そこまでやられたということについては1つのモデルにはなるのではないかなと思います。

そこで、東布施、田家の統合については、東布施では地区の住民懇談会を2回開きました。PTAの懇談会も開いております。この後、田家地区に対する懇談会も年度内には、田家地区の皆さん方に対する住民懇談会を開く予定であります。そういうふうに、一歩一歩ではありますが、懇談会なり議論を重ねながら、できるだけ計画に近いところで統合をさせていきたいと思っています。

そこで、今までいろんな意見を聞いてきている中で、例えば、田家と東布施だけでいいのかという意見もいろいろ聞きます。鷹施中学校校下でもう一つ一緒にやったらどうかと、要は、田家、東布施、石田というところで1つの小学校というのも考えられるのではないと言われる方もおられますので、私も将来はそういうことも十分可能性としてあるなと思っています。ただ、今、現実的な話として、まずは田家と東布施さんが統合されるのが現実的ではないかと。なぜなら、東布施小学校が平成24年、再来年度から複式学級が出ます、1つ。これは国の決まりですから、国と県の基準は若干違うんですが、県では15人以下になったら複式学級にきなさいということもありますので、24年度で複式学級が1つ出ます。26年度で2つ出ます、東布施の場合。ですから、そういう状況になるものは、もう、統合をしておかないと、いろんな面で支障が出るだろうと思いますので、そのあたりが1つの統合の目標年度になっていくのではないかと思いますので、まだまだ教育委員会の関係には少し覚悟が足りんと、とにかく、やっぱりもっとしっかりと進める、まず覚悟を持って進めていかないと、できればやりましょうみたいなようなことでは、言われるとおりになかなか動かんだろうと思いますので、今回のタウンミーティングのテーマにも最初は少し重いという話もあったんですが、まずはこういうテーマに出しながら議論を重ねていって、そして着実に統合できるような格好で進めていきたい。

前沢地区からは平成30年まで待たんならんかという意見も出ました。そういう地区の役員の方からであります、地区によってはもっと早くというところがあれば、それはそれでその状況に応じて対応していきたいと考えております。

中学校もいずれはやっぱり4つを3つというふうには思いますが、その場合には、校舎そのものを、学校そのものを1つ新しいものをつくるという考え方におそくなる可能性が高いものですから、なかなか近いうちというのは現実的にはどうかなと思いますので、小学校においては、今言ったような状況の中で、先に幾つか統合できるところがあるように思いますので、そういうことを先に進めていければと思っています。

今、小学校区の区域というのはほぼ守られております。私もちょっと勘違いしておったところがあるんですが、例えば、前沢小学校と三日市小学校で非常に学校の距離が近いから、ある地域は自由に選べるのかと思ったら、線引きはしっかりされておりまして、前沢小学校が100メートルか200メートル後ろにあるんだけれども三日市小学校に通う区域の人は三日市小学校へ行っているし、歩いて二、三分で行けるところにあっても、その辺のことは、規則的なことについてはしっかり守られていると思いますので、特別な地域じゃない限りは大体守られているような状況であります。学校校区を変えるということもなかなか、再編が進めばその時点時点で考えていかなければいけないですが、現状の校区をいじるということはなかなか難しいのではないかと思います。

【事務局】

Dさん、よろしいでしょうか。

ほかにどうですか。

【Eさん】

沓掛地区のEです。お願いします。

観光のことですけれども、ずばり、平たく言ったら、もっともうけにつながるようなアイデアの観光にならないのかなと常々感じています。例えば、黒部といえば宇奈月温泉ですけれども、市長も乗られた、写真に載っていた電気自動車の、あれはあくまでもデモンストレーション的なものもあろうと思うんですけど、自分も実際、1人乗りに乗って見たんですけれども、あれはあれでおもしろいけれども、自分は乗っていて、例えば、仮にデモンストレーションであったとしても2人乗りとか3人乗りとか、そういう決まったエリアで動かす分には何かしら特例的にやるようなアイデアもあってもいいんじゃないかと感じているので、広く観光でいうと、東京からのつながりという、まさしく新幹線が今つながってくるけれども、首都圏の金を持っている人、それから中京圏、名古屋近辺のお金を持っている人、それから大阪近辺のお金を持っておる人が、海外とか県外の人が、圧倒的にネームバリューは黒部、宇奈月ってあるにもかかわらず、やっぱりそれが生かし切れていないというのが歯がゆいというか、悔しいと思うので、例えば、今、再び、環境環境というならば、もう一度JRのサンダーバード3両を宇奈月まで延長運転するとか、以前通っていたように名鉄の車両を延長して黒部、宇奈月まで入れるとか、JR東海のワイドビューひだの延長運転で宇奈月まで入れるとかということを含んでは、はっきり言って、お金も時間もあるという都市部の人がたくさんいるので、その方々の財布のお金をどうやってこっちで使って落としてもらうかということでない、幾らこの地方のじいちゃん、ばあちゃんのことでもちまちま動いておっても、やっぱり、もうけにつながっていないので、お金と時間のある人にぜひとも来てもらう、そういうシステム、時刻表を見れば宇奈月までつながっていることがあるだけでも、当然、廃止になったいきさつとかいろいろ知っているんですけれども、技術的なこととか、お金がかかるとか、もろもろ経過があったけれども、今、再びサンダーバードの宇奈月までの延長とかワイドビューひだのJRとか、あるいは名古屋鉄道の車両を宇奈月まで入れるとか、もっと言えば、首都圏のお金を持っている人が宇奈月で別荘を建ててもいいわというぐらいに圧倒的にネームバリューがあるにもかかわらず、やっぱり、宇奈月でちょっと滞在しようかという、お金が落ちるようなものでないと、別荘の1つや2つ、東京とか大阪とか名古屋の方が持ってもいいんじゃないかなと、黒部とか宇奈月とかという指名が来るような、そういう看板をだんと出すくらいでない、やっぱり、ちまちまとお金を動かしておるだけではもうけにならないので、もっと言えば、海外のお金持ちとかに来てもらえるようなものでないと、すぐに、例えば、ヘリコプターでちょっと遊覧したいという人もおれば、即、富山空港とか、民間のヘリを持ってきて、じゃ、動かしましょうというくらい、お金がかかってもやってもいいという人はたくさんいるので、そこはもっと金持ちが喜ぶような内容とかシステムにしたほうが、はっきり言って、宇奈月温泉を見ると、和倉温泉とかと比べても変やけれども、ちょっと貧弱で、もっとうまいアイデアを出せばお金が使えるのに活かされていないのは、別に行政側の責任じゃないけれども、もっと何か民間のアイデアとかを入れるべきじゃないかと常々感じていますので、市長の何か明るい話など、聞かせてください。

以上です。

【市長】

ありがとうございました。

まず、電気自動車のことは知っておられると思うんだけど、オープンカーのああいう企画の中で2人乗りというのは許可されていない。私も2人乗り、何でつくらぬのと最初に言ったんだけど、ああいうオープンカーでの、ああいう電気自動車での2人乗りが許可されていないのでああいう形になって1人乗りになったそうですが、やはり、言われるように、免許を持たないと乗れないから子供が乗れない。やっぱり、親子で乗るとか、カップルで乗るとかというのにしないとなかなかたくさんの人に乘ってもらうということは難しいだろうと。ただ、1つのデモンストレーションで、言われるように、ああいうものをまず走らせる中で、いろいろ屋根式であれば許可されるということであれば、もう少し新しい形のものを導入することも可能なのかなと思います。あれ、非常に結構おもしろいです。ゴーカートみたいな低い視線で街の中を走るといのは、結構楽しいことは楽しいです。ただ、自動車の普通免許を持たないと乗れないですから、子供を乗せることができませんので、その辺の工夫をもうちょっとせないかなと思います。公道を走るには、もちろん、免許を持たないと走れないので、なら、公道じゃなければいいのかということも考えながら、少し工夫をする必要があるのではないかなと思います。

それから、金と時間がある人を呼べという話。非常に大事なところだと思います。宇奈月温泉そのものが、どういう人を見込み客としてターゲットとしているかということがはっきりしていないことはおっしゃるとおりです。お金と時間のある人の誘客をしていくのか、もっと違った、若者とか、家族とか、カップルとかのところ、その辺のコンセプトが明確になっていないから非常にぼやけています。それは、私もそのとおりと思っています。

お金持ちが宇奈月温泉を選ばれるかといったら、今現在だったら無理だと思います。特に、海外からのお客さんで、特に中国なんかでお金持ちと言われている人たちが、まず、日本にはなかなか行かない。ほとんどがヨーロッパなどへ行かれるということで、日本がまず、中国のお金持ちは日本を選ぶかどうかはまた別物である。だから、お金持ちに選ばれるような、そういうコンセプトの温泉街なり観光地をつくるというのはなかなか厳しいのではないかなと。宇奈月温泉の中でも、高級な部分も今はなくなってきて、安い部分もなくなってきて、湯快リゾートなりと対抗できるかといったら、それもできない。高級ブランドにもなれない。その中間で、中途半端で団体客の昔のサービスをそのまま引きずっているから、なかなかコンセプトがはっきりしない。その辺も我々は議論の中で言っているんですが、高級ブランド化するにはかなりの設備投資が要るからなかなか対応できない。安いお客さんに対しても、かなりの設備投資が要ります。システムそのものを、今までのシステム、やり方を全部変えないと6,000、7,000円のお客さんの対応がなかなかできない。その辺で、実は宇奈月温泉の方々も、考え、理屈はわかっているんだけど、設備投資をしなければ、要は、体制を変えなければならぬから、なかなか切りかえができませんで悩んでおられるというのは現実です。

そこで、高級ブランドにはなかなか切れないと思いますので、なら、時間があるお年寄りとか、あるいは若い人たちの中でも時間のある人たちをどう取り込むかというようなことについては、これは設備投資しなくても、少し工夫すればいろいろと考え方はあると思いますね。宇奈月温泉の方々とも話している中で、何回か言ったんですが、伊豆のほうなんかでいったら、断食ツアーというのがあって、せっかく温泉に行くんだけど3日間なら3日間ほとんど食べさせないコースというのがあるんです。4万8,000円とか5万幾

らとかで。温泉へ行って、お風呂へ行って、おいしい料理を食べてくるのかと思ったら、断食ツアーというのがあって、3日間、健康とか美容とか、そういうもののいろんな体験はできるんだけど、おいしい米がゆと、おいしい梅干しと何とかで3日間おって、体のリフレッシュといますかね、気分転換とリフレッシュして気持ちよく、4万、5万払って帰ってきて、それでよかったと言って帰って来られる若い女性の方々はたくさんおられるそうですから、何でも、料理とってただ食べさせればいいというものでもないし、工夫次第ではそういうようなことも考えられるし、昔の湯治場へ行ったように、今の現代版みたいなことを、ちょっと安い料金で、あんまりフルサービスではないけれども、こういう料金で、こういうサービスの内容で、こういうことでという仕組みをつくっておけば、それなりに生き残っていく道はあるような気がするんだけど、なかなか今現在、宇奈月温泉の話というのは、なかなか時間がかかって難しいですが、宇奈月温泉の最大の特徴は、ピークの山と谷がもう極端ですね。

多い月は宇奈月温泉で6万人ほど泊まっているんですよ。それ以上、絶対泊まれないんです、もう。毎日満杯でそれだけしか入れない。それなりの料金で、1万幾らかの料金で6万人ほど泊まれる月と1万人ほどの月とあるから困るんです。1万人のときはがらがらですよ。だから、ほんとうに紅葉シーズンの真っ盛りとか、深緑のトロッコ電車が動いてゴールデンウィークのときは、それ以上泊まれないだけ来られる。ところが、山と谷が極端なものだから、平均したら三十何万人ということになって、経営的には厳しいねって、その山谷、谷は埋めたいけれども、山はこれ以上高くできないという、この悩みが非常に難しいのではないかなと。その辺の工夫、なら、谷をどうやって埋めるかというような工夫などが、さっき行ったような湯治場の発想とか、そういうときに断食ツアーみたいな、何か企画で増やすことを考えていかないと。ですから、海外のお客さんとかといたら、ピーク月にそういうのを持っていくと要らないってみんな断られるんです。そんな海外からの7,000円、8,000円の人をピーク月に持ってこられたって、一般の普通の人で、1万幾らで払ってくれる人がたくさん来ておられるわけですから、その辺の状況も知りながら、いろんな企画をつくっていかないと、宇奈月温泉はどういうような状況、トロッコ電車ももちろんそうなんですけれども、非常に特徴のある温泉、普通の温泉街とは全然違いますよね。加賀温泉郷なんかへ行ったら、山と谷というのは二、三割しか違わない。減っても2割か3割です。それが3分の1になるとか、4分の1になるということはあんまりないんだけど、ほかの温泉街は。宇奈月の場合はそういうような特徴を持っているということなどもあって、そういう中でいろんな仕組みを考えていると、時間がある方にはそういう湯治場的な発想とか、私は、今、黒部川を利用したアドベンチャー、遊びですけど、スポーツができないだろうかといって、ラフティングしたり、キャニオニングしたり、この間はEポートというやつもやりましたけど、今度は熱気球もやってみようかなと思ってはいるんですが、宇奈月で、要は、遊びがないんですよ。若い人たちも呼べるような遊びをいろいろ、やっぱり、メニューつくって品ぞろえして、ラフティングなんかでもやったらこれはおもしろいという、群馬県の水上市温泉はキャニオニングだけで1万人以上来ているという、この間、日曜日かなんかのお昼時間にやっていたと思うんですが、キャニオニングだけで10万人来るといいますから、水上市温泉は。都会が近いからだだと思いますけれども。そういうような遊びを持ち込んだり、いろんなメニューをつくっておかないと、な

かなかお客さんは来ないと。全国に温泉は2,000カ所ほどありますからね。温泉、温泉と
いっておたつて2,000カ所で温泉、温泉って言っていますから、それはやっぱり誘客に
はなかなかならんだろうなと。逆に言ったら、温泉ではもう人は来ないということから始
めて、なら、何で呼ぶんやと、温泉はあって当たり前というような感覚から始めないと
なかなか難しいのではないかなというような感じはします。

料理で呼べればいいんだけど、料理でも、これも、かなり。氷見の誉一山荘がなかなか
予約がとれないって知ってます？もうほとんど何カ月待ちの予約ですよ。そのかわり、1
泊、五、六万は払わないといけませんけれども。東京から三國さんが来られて、今、調理
しておられますけど、そういうところは予約がとれんほど、入れる人数は限られています
けど、やっぱり、そういうふうにもなっていますし、雅楽倶なんかでもなかなか予約がと
れんといううさもありますので、それはそれなりの料金がしますけれども、結構、そう
いうニーズもあるということなので、どの辺をどうねらうかということは、やっぱり、明
確にコンセプトしないと難しいのではないかなと。

【事務局】

Eさん、よろしいですか。

最初にお話した終了予定時間ですが、既に、若干過ぎております。大変、申しわけご
ざいですが、あとお一人のご発言とさせていただきますと思いますので、ご理解、ご協
力をお願いいたします。

どなたか、お一人いらっしゃいませんか。

いらっしゃらないようですので、これまでいろんなご意見をいただきましたが、予定の
時間となりましたので、以上で本日のタウンミーティングを閉じさせていただきますと思
います。

それでは、閉会にあたりまして、堀内市長から、本日お集まりいただきました皆様への
お礼も含めまして、ごあいさつ申し上げます。

【市長】

お仕事の後の大変お疲れのところ、ありがとうございます。

今日は、特に、小中学校の再編についてはいろいろ意見が出るだろうと期待をしながら
各会場を回ったんですが、このことについては、各会場、あんまり実はほんとうに意見が
出なかったんです。さっき言われましたように、総論賛成、各論反対みたいなところで、
実際にやろうとしたらなかなか難しいことになるのではないかなとは思っておりますが、
とにかく、部活ができないとか、いろんな状況が今後出てきますので、やはり、子供たち
の教育ということを観点に考えて進めていくには、やはり、3年後、4年後にこういうこ
とを実現するためには今ぐらいからきっかりとした議論をしていくことが大事であります。
この後、各地区にいろいろ具体的にご相談を申し上げていきたいと思いますが、そういう
広い視野に立って、先ほどもありました、将来を見据えてきちっとした教育環境をつくら
せていくことが大変大事だと思いますので、皆さん方には引き続き、またご理解、ご協力を
賜りたいと思います。

それともう一つ、観光の問題であります。これも日本全国あるいは世界中で観光振興

を打っています。これもほんとうに日本全国の都市間競争になっていくだろうと思います。特に、旧黒部におきましては、観光というものは実はほとんど意識したことがなかったんだらうと思います。そこで、都市観光という概念の中で、生地のまち歩きがスタートして実績を上げてこられた。大変多くの方に、地元の方にご苦勞をおかけしましたが、そういうものを1つのモデルとしながら、各地区でそういう自分たちの地域を再発見して、それを磨き上げて、それをいろんな人たちに体験していただくことが大事であって、地元の人たちが楽しんでいるものを市外、県外から来られた人を楽しんでもらうという着地型の観光というものが、観光客のために何か仕組みをつくったら、ほとんど見透かされて楽しんでもらうことはできません。祭りにしてもそうですし、いろんな食べ物などにしても、地元の人がおいしい、うまいと言って食べているものをどうやってそれを観光化するかということが大事でありまして、お土産物もそうです。お土産のためにつくられたものは、ほとんど売り上げは伸びておりませんので、地元の人たちが楽しんでいるもの、感じているものをどうやって、そういうふうに観光資源に広げていくかという観点でありますから、その辺は大変難しいです。

実は、今日、担当課とも話をしていたんですが、今日は来ておりますが、直売場なんかでも、お土産品売り場をつくりましょうといったって、売る商品が実はないんです。売る商品が1年通して準備するということは、地元のもですよ、県外からも回ってきた、全国的なお土産はどこにでもあるんですが、そうじゃなくて、地元として、やっぱり、山もんであったり、水産物であったり、加工品であったり、漬物であったり、みそでもしょうゆでも昆布でもいいんですが、それがしっかりと1年間きちっと売りに並べられるかといったら、ほとんど今の状況では無理です。ですから、やっぱり、観光化されていませんので、それだけの、要は、地産地消じゃなくて、要は消費、マーケットに対応できるだけの生産体制になり、仕入れの体制をつくっていかないと、そこがなくて売り場をつくっても、並べる商品がある時期はあるんだけど、あるいは午前中はあったけど昼から行ったら全然なかった。あるいは、さっき言ったように、宇奈月方面なんかやったら、ピークと谷がものすごい山と谷が深いですから、山で来られたら、1日に何千人も来るんですよ、あのビール館の前の売りに。そこへ来て、わっと観光バスが4台も5台も6台も泊まって買い物されたら、あつという間になくなる。そして、その後來られた人は何も地元のものはないぜって言われると。そのあたりの体制づくりはやっぱり考えていかないと、マーケットに応じたそれだけの納入体制をつくっていかないと、やっぱり、なかなか対応できないだろうなと思いますので、これからまだまだ、さっき言った、コミュニティ黒部なり、それ以外の、宇奈月温泉、黒部峡谷以外のところは、観光というものについてはまだまだこれからの段階だと思っておりますので、特に、着地型、地元の体験型観光というのは地元に住んでおられる皆さん方の理解と協力というのが一番大事でありますので、ぜひ、生地並びに村椿地区の、あるいは石田地区のほうもそうですが、そういうところが観光資源になる、観光地域になるということでもありますので、ぜひ、これからもご理解とご協力を賜りますようお願いを申し上げて、お礼の言葉にさせていただきたいと思っております。 本日は大変ありがとうございました。

【事務局】

本日はどうもありがとうございました。

会場にお忘れ物のないよう、またお気をつけてお帰りいただきますようよろしくお願いいたします。

なお、先ほどお配りいたしました、アンケート用紙ではありますが、ご記入の上会場出口の回収箱へお入れくださいますよう、よろしくお願いいたします。

本日は、どうもありがとうございました。

— 了 —